

1 石の懸樋とは

田原用水水路橋（石の懸樋）は、赤磐市南東部を流れる小野田川と田原用水が交差する場所にかけていた江戸時代初期の石造水路橋です。

岡山藩郡代津田永忠の指揮により設置された国内でも最大規模の水路橋であり、当時の最高水準の石材加工技術を用いて築造された貴重な農業土木遺産です。

昭和57年（1982）に小野田川の改修工事により、川底の下へ水を流すサイフォン式へ改造され、役目を終えた石の懸樋は、解体後、現在の赤磐市徳富に移築復元されています。

2 石の懸樋が作られたわけ

田原用水は和気町田原上の吉井川に築かれた田原井堰で取水され、岡山市東区瀬戸町下の砂川まで送る総延長約18kmの用水路です。吉井川右岸と赤磐市南部の約700町歩をはじめ、さらに砂川に流れ込んだ用水は、岡山藩の新田開発で干拓された沖新田の灌漑にも利用されました。これにより、藩財政の安定化も図ることができました。

寛永年間（1624～1643）には吉井川から取水し一部地域への灌漑が始まりましたが、用水の水を下流の農地まで届かせるためには、小野田川を越える必要がありました。

そこで、川の上に田原用水を流す“水の立体交差点”石の懸樋が設けられたのです。

3 石の懸樋と完成時期

高度な技術によって造られた石の懸樋は、津田永忠が招いた上方職人河内屋治兵衛を頭領とする石工集団と普請奉行近藤七助によるものです。七助は、郡内の普請期間（貞享4年（1687）～元禄9年（1696））のうち2年間を田原用水の工事に当てました。

田原用水の完成時期は諸説ありますが、「吉原村 大庄屋弓削家文書」の「手引書」他の文献資料から、元禄7年（1694）が有力な説のようです。石の懸樋も同時期と推定されます。

田原用水と石の懸樋の位置



津田永忠 1640-1707

元禄時代を中心に活躍、岡山藩主池田光政・綱政に仕えた重臣。国の特別史跡「旧閑谷学校」の創建や、特別名勝「岡山後楽園」の造園を行う。

また、大規模な新田の開発と用水路の整備によって耕地不足の解消に尽力し、さらに、大多府漁港の元禄防波堤の港湾整備を行うなど、現在の私たちの生活に深く関わりを持つ事業に貢献した人物である。

▼石の懸樋の上梁の上に橋をかけ、生活道にしていた

